Journal of Asian and African Studies, No. 31, 1986

現代中国語の主主動補と賓主動補

今 井 敬 子
(信州大学)

Logical Subjects of the Resultative Complements in Chinese

IMAI, Keiko
Shinshuu University

At least two different logical subjects can be assumed for the *chi+wan* 'eat+finish' vs. *chi+bao* 'eat+full' type resultative verb constructions in modern Chinese. Different syntactic behaviors of these resultative verb constructions can be best demonstrated, once these constructions undergo the passive and/or object-shift transformations. The *chi+wan* 'eat+finish' type can undergo these transformations but not the *chi+bao* 'eat+full' type. In other words, the syntactic difference consists in the fact that these constructions can undergo the passivization, if and only if the logical subject of these resultative complements happens to be the object of these transitive verb sentences, or "the pretransitive is available if the complement belongs to the (logical) object but not if it belongs to the (logical) subject (Y. R. Chao 1965, 636)." However, no syntactic explanation has ever been offered for the question: why these constructions can or cannot undergo these transformations. We interpret that it is not due to the difference of the logical subject whether these constructions can undergo the transformation. A transitive verb ceases to be 'transitive' on the surface, once it occurs in the resultative verb construction in Chinese, when the logical subject of the complement happens to be the subject of the sentence. The objects of these transitive verbs do not surface, except for the "empty object" (S. E. Yakhontov 1957, 39) occurring in such pseudo verb+object phrases as *chi+fan* 'to eat', *shuo+hua* 'to speak', etc. An empty object ceases to be 'empty', once it occurs in the surface subject position of a passive construction or the pretransitive position of an ordinary transitive verb construction. It is thus concluded that the applicability and non-applicability of passive and/or pretransitive transformations of Chinese resultative verb constructions is not due to the difference of these complements' logical subjects but to the general disappearance of the objects on the surface in Chinese resultative verb constructions.

1. はじめに
2. 受動構文とのかかわり
3. 対格構文とのかかわり
4. 動補構造の目的語
5. 主主動補の補語
6. おわりに
例文引用作品の略称リスト

1. はじめに

現代中国語の複合動詞の中には：

拉倒‘ひきたおす’<拉‘ひく’＋倒‘たおれる’

看破‘みやぶる’<看‘みる’＋破‘やぶれる’

のように，動作・行為そのものが第一の成分によって表わされ，その動作・行為を遂行することによってひきおこされる結果，或いはその結果生じる状態が第二の成分によって表わされるものが，かなり広汎に見られる。意味の上から見ると，動作・行為とその結果・結果の状態という関係にあるこの両成分も，文法的には，動詞（広義の動詞）とその補語という関係にあるので，この両成分の結合関係と結合体とは，ともに「動補構造」と呼ばれる。

動補関係にある複合動詞は，たとえば：

終于拉倒了窗前的几棵树‘とうとう，窓の前の木々をひきたおした’

对方的计谋没看破过‘相手の計略は，見破られたことがなかった’

のように，単一の動詞とまったく同じように，動補関係にある結合体が全体として動詞語尾（接尾辞）をとる。又，なかには：

放心不下‘安心できない’<放‘はなす’＋心‘心を’＋不(否定詞)＋下‘おろす’

说翻脸了‘仲違いした’<说‘話して’＋翻‘ひっくりかえす’＋脸‘かおを’＋了（完了）

のように[1] 動補関係にある二つの成分の中の第一の成分（放）だけや，第二の成分（翻）だけが目的語をとるというような例が全くないわけではないが，そのようなものは，やはり特例であって，ふつうには上に挙げた例に見られるように：

拉倒＋树‘木をひきたおす’

看破＋计谋‘計略をみやぶる’

といったかたちで，動補結合体が全体として一つの目的語をとる。そのために，このような動補関係にある表現は，いずれも単一の複合語とみなされてきた。そうしたことから，たとえば赵（1965）は，同じ動補「複合語」であっても，その中には：

（1）革新（革‘かえる’＋新‘あたらしく’）

改良（改‘あらためる’＋良‘よく’）

のように，これ以上拡張できないものもあれば[2]，

（2）吃饱（吃‘たべる’＋饱‘たらふく’）

→吃不饱‘十分たべられない’

→吃的太饱‘たべすぎる’

撵跑（撵‘追う’＋跑‘走る’）→撵不跑‘追いはらえない’→撵的他直跑‘彼を走りづめにするように追いはらう’

のように，かなり大規模に拡張されて，主語（吃的，撵的）と述語（太饱，他直跑）から成る句になってしまうものもあるし，或いはこの両極端の中間に位置するものとして：

（3）看破（看‘みる’＋破‘やぶれる’）→

看的破‘みやぶることができる’

看不破‘みやぶることができない’

のように，可能形，不可能形は作れるが，それ以上の拡張は不可能な中間タイプも存在することを認めながらも，吃的太饱‘たべすぎ

1) 例文は赵元任 1965, pp. 637 と 640 より。
2) 赵 1965, p. 585

る'や'撵的他直跑''彼を走りづめにするように追いはらう'については，そのもととなった複合語の'吃饱'，'撵跑'とは別の「主語＋述語」という内部構成をもつ叙述語補語構文であるとしなければならなかった[3]。

念のために付け加えると，これは：

我要把那棵树拉倒'私はあの木をひき倒しましょう'

我要把那場买卖拉倒'私はあの商売を打ち切りにしよう'

のような同形異義語のことを言っているのではなく，同じ'吃'と'饱'，'撵'と'跑'の結合体について言っているのである。

2. 受動構文とのかかわり

これに対して，受動構文の中での動補構造のはたらき方の違いに注目して，これまで複合語とみなされてきた動補構造を新たに捉え直したのが余（1964）であった。余は，動補構造が，その主要動詞の含まれる構成成分文と，補語の来源する構成成分文との二つから成っていて，後者は前者に嵌め込まれているとみなす考えを提出した。

動補構造は，かならず，ある動作・行為を表わす動詞と，その動作・行為の遂行された結果生じる状態を表わす補語を備えている。たとえば：

他吃完了饭了'彼はご飯を食べ終った'

他吃饱了饭了'彼はご飯をおなか一杯食べた'

の二つの動補構造文は，表面では，動詞＋補語という一律の構成を見せていて，何のちがいも見られないが，受動構文の中でのおこり方を見てみると：

饭给他吃完了'ご飯は彼に食べられてしまった'

とは言えても：

*饭给他吃饱了'ご飯は彼におなか一杯食べられてしまった'

とは言えない——という差異が見出される。この違いは，'吃完'と'吃饱'とをどちらも単一の複合動詞とみなしてしまっては，統辞論的な説明が不可能にってしまう，というのである[4]。余（1966）は，上掲の文を分析して，

他吃完了饭了

という文は，'他吃了饭了'という母体文に，'饭完了'という文が嵌め込まれてできているのに対し，

他吃饱了饭了

という文は，同じ'他吃了饭了'という母体文に，'他饱了'という文が嵌め込まれていると解釈し：

嵌め込まれた文の主語が母体文の目的語と等しい場合（他吃饭＋饭完）は，受動文が成立するが（饭给他吃完），主語と等しい場合（他吃饭＋他饱）は受動文が成立しない（*饭给他吃饱）。

という規則を見出している[5]。

この論理に我々はそのまま従えるのであるが，しかし，それはあくまで事象のあるがままの総括でしかなく，それでは，嵌め込まれた文の主語が母体文の目的語と等しいときには，なぜ受動文が成立し，主語と等しいときにはなぜ受動文が成立しないのかという質問には何一つ答えていないのである。余はのちに，受動文と方法副詞句との共起関係に注目し（余 1971 b），方法副詞句の主語は必ず嵌め込まれる母体文の主語と等しくなければならないので，受動文の場合も同様である（余 1971b, p. 75）と結論するのであるが，この論理は我々にはよくわからない。中国語の受動文の構造をどのように分析するにせよ，上掲の嵌め込まれた文——饭完，他饱——は，能動部の補語であって，直ぐ受動部に結びつ

3) 赵 1965, p. 590

4) 余 1964, p. 37; 1966, p. 140; 1971, p. 38

5) 余 1966, p. 147; 1971, p. 39

く方法副詞句とはならないからである。

3. 対格構文とのかかわり

'吃完'：'吃饱'の間に見られるような統辞法上の差異は，赵 (1965) も注目していて，両者の変換形の上の違いの一つとして：

我把他罵哭了 '私は彼を叱って泣かせてしまった'

とは言えても：

*我把事做累了 '私は仕事をやり疲れた'

とは言えないことを指摘している[6]。ただし，赵はこの違いを，動補構造の中の補語に対する「論理上の主語」が何であるか——その文の中の文法上の主語であるか，それとも目的語であるかによるものであるとしている。すなわち，'罵哭'の中の'哭'の論理上の主語は'他'であるから，'我把他罵哭了'と言えるが，'做累'の中の'累'の論理上の主語は'事'ではなくて'我'であるから，'*我把事做累了'とは言えないというのである。

しかし，この論理も我々にはよくわからない。もしも：

*我把事做累了

が，単に：

我做累了事

の目的語を，介詞「把」を付して主動詞の前に持ち出しただけの構造であるとしたら：

我做累了事

という，主動詞のあとに目的語を置いた本来の後置形が可能であるからには，これだけでなぜ，前置形が不可能であるのか，十分な構造上の説明がなければ，上に指摘した'罵哭'と'做累'の統辞法上のちがいを明らかにしたことにはならないのである。そのため赵自身：

我酒醉饭饱 '私は，酒は酔うほど飲んだしご飯はおなか一杯食べた'

のような言い方があることから，その類推で：

你得把饭吃饱了 'あなたはご飯をおなか一杯食べなければなりませんよ'

というような言い方が，「非論理的な形式」であるにもかかわらず存在すると認めてしまうことになる[7]。

4. 動補構造の目的語

ここで，'吃完'タイプと'吃饱'タイプとの統辞構造上の違いを確認しておくと：

他吃完饭……補語'完'の論理上の主語は動補構造の目的語'饭'である。

他吃饱饭……補語'饱'の論理上の主語は動補構造の主語'他'である。

ということになる。この違いに基づき，以下，前者を賓主動補，後者を主主動補と呼んで区別することとする。

賓主動補が，受動構文や対格構文に自由に現われるのに対して，主主動補はそれができないという事実が存在し，余霭芹や赵元任がその事実に関して分析を行っているが，いずれも何故という問いに答えていないのは，ふたりとも，ひとつの重大な事象に注目していないためである。

中国語の動補構造は，全体としてかなり自由に，後置される目的語をとれるかのように受け取られているが，必ずしもそうではない。賓主動補の場合は，補語部が目的語に加えられた動作・行為の遂行された結果としての状況を表わす語であるため，自由に目的語をとることができるが，主主動補の場合は，非常に限られてくる。客観的な論証のために，「白話百万字テキスト」[8]に現われた主主

6) 赵 1965, p. 636
7) 赵 1965, p. 636
8) 通産省電子技術総合研究所で KWIC 印出された，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の『白話100万字テキストのコンピュータ・ファイル』。五四運動以来の白話文百万字が機械処理され，ファイルされている。詳しくは，『中国語学』222号を参照されたい。

表 1

主主動補の総数		132	100%	
目的語をとらないもの	a. 動＋補	90	68.2	
	b. 動＋目，動＋補	3	2.3	
	c. 動$_1$＋目，動$_2$＋補	5	3.8	
	計	98	74.3	
目的誤をとるもの	a. 動＋補＋目 1. 目＝単語	24	18.2	～慣17　～会3　～懂2　～饱1　～酔1
	2. 目＝主述連語	9	6.8	～慣5　～明白2　～会2
	b. 把＋目＋動＋補	1	0.7	～賦1
	計		25.7	

動補の例を集計してみると，表1のような結果が見られる。

表1によると，目的語をとらない例ととる例との総数比は，およそ3:1であり，主主動補が目的語をとりにくい構造であることがわかる。しかも，目的語をとる場合も，その目的語には一定の制限があると思われる。たとえば，表1には目的語をとる‘～饱’，‘～酔’がそれぞれ一件ずつ見られるが，その例文は：

1)　他们一天吃饱饭，闲得没有事做（家18）
　　‘彼らは一日中満腹していて，ひまですることがない’

2)　妹夫喝酔了酒回来了（秧257）
　　‘妹の夫は酒に酔って帰ってきた’

である。これらは：

吃饱饭→吃饱
喝酔酒→喝酔

のように，目的語を消去しても動補構造が依然として成立し，しかもその動補構造全体の意味は，目的語をとっている場合と比べてもさほど欠けるところがない。このような目的語は，具体的な事物を表わしているわけではなく，動補構造に何も新しい情報を付け加えてはいない。現代中国語には：

说话‘話をする’
买东西‘買物をする’
唱歌‘歌を歌う’
走路‘道を歩く’

のような動賓構造があるが，これらの中に見られる目的語が実質的な意味をもって使われているのではないことは，すでに，ドラグノフ[9]，ヤーホントフ[10]，橋本[11]などによって指摘されている。こうした構造は，橋本（1981）の言葉を借りれば「かたちのうえでは，動詞＋目的語という構成をもちながら，じっさいには，動作とその目的物をあらわすというよりは，この動詞と目的語（みせかけの目的語）との結合体ぜんたいで，その動詞部によってあらわされる動作を遂行することだけをあらわす」ということになる。‘吃饭’（食事をする），‘喝酒’（酒を飲む，飲酒する）は，そのような動補構造であるし，又，‘吃饱饭’，‘喝酔酒’という「動補構造＋目的語」の構成体も，その動補構造が全体として一つの動詞のようにはたらき，全体として一つの目的語をとっていると理解すると，まさに，「『みせか

9)　ドラグノフ 1952，中文訳の p. 107
10)　ヤーホントフ 1957，日本語訳の p. 98 以下
11)　橋本 1981，p. 53 以下

けの目的語』を伴なった動賓構造」と同じものであると言うこができる。つまり，‘吃饱’，‘喝醉’に対して‘饭’，‘酒’が実質的な意味を担っているわけではなく，これらは，ドラグノフやヤーホントフの言う「虚目的語」でしかない。

‘吃饱’がとることのできる目的語は，唯一，‘饭’だけであり，同じように‘喝醉’の場合は，‘酒’だけである。次のように，目的語が個別的，具体的なものを表わすような場合には，その目的語を‘吃饱’，‘喝醉’の後に置くことができない：

3) *吃饱了这顿饭‘この食事をおなか一杯食べた’

4) *吃饱了饺子‘ギョーザをおなか一杯食べた’

5) *喝醉了两杯酒‘酒を二杯飲んで酔った’

6) *喝醉了茅台酒‘マオタイ酒を飲んで酔った’

このように，目的語についての明確な描写が必要な時には，通常，「動詞＋目的語・動詞＋補語」のように，一度目的語をとった動詞語形を言っておいて，その後で再び，その動詞語根と補語を伴なった言い方をくりかえすという形式が用いられる。たとえば，例5)をこの形式で表わすと：

5)’喝两杯酒喝醉了

のようになる。

中国語——特に，北方語を基礎とした標準語では，はだかの名詞が目的語として用いられていても，それが‘不定’であるとは，必ずしも言い切れないが，‘吃饱饭’の‘饭’の場合は，それが虚目的語である以上，言うまでもなく，特定の，具体的な事物を表わしてはいない。したがって，虚目的語‘饭’を「把」字を付して「提前」することはできず；

吃饱饭了→*把饭吃饱了

という変換は不可能である。逆に，もしも：

把饭吃饱了

が成立するとしたら，その時の‘饭’は，個別的，具体的な‘饭’でなければならず，

把饭吃饱了‘お米のご飯をおなか一杯食べた’

のような意味になる。しかし，‘吃饱’が，このような個別的，具体的な事物を意味する単語を目的語にとれないことは，先に述べたとおりである。結局，‘吃饱饭’が「把」字文の中で用いられないのは，‘吃饱’が虚目的語しかとることができないからであり，同じ理由によって，「被」字文の中でも用いられないのである[12]。‘喝醉酒’についても，同様のことが言える。

虚目的語しかとれない動補構造‘吃饱’，‘喝醉’は，その二つの成分の間の意味関係においても特徴が見られる。すなわち，‘饱’（満腹する）という状態の原因となる行為は，‘吃’（食べる，のむ）だけであり，又，‘醉（酔う）という状態についても，‘喝（酒）’（飲酒する）という行為だけが，その原因となりうるのである。常用されている他の動補構造の場合，一つの補語に対して，複数の動詞が結びつくことができ，たとえば：

推倒　‘押し倒す’

拉倒　‘引き倒す’

碰倒　‘ぶつかって倒す’

のように，原因となる行為が唯一ではないというのが，通常の状況であるが，これに対し，‘吃——饱’，‘喝——醉’は，きわめて例外的であると言える。‘吃’，‘喝’という行為が，‘饱’，‘醉’という状態を導き得る唯一の行為であるということは，他の語の選択の余地がないことに外ならず，それは，‘吃’，‘喝’をあえて表示しなくとも済むということにつながる。‘吃饱了’と‘饱了’及び’喝醉了’と‘醉了’が提供する情報の内容には，あまり違いがなく，両者は形式の上でだけ異っていると言っても言いすぎではないであろう。

12) 「被」字文の主語が，「把」字文の目的語同様，特定の具体的なものを表わす語でなければならないことは，王还 1959 などによって指摘されている。

主主動補の中には，目的語をとらないものが圧倒的に多いということを，先に表1において見た。それは，たとえば：

等累　‘待ちくたびれる’
饿死　‘飢えて死ぬ’
晕倒　‘気絶して倒れる’
枯黄　‘枯れて黄色くなる’

のようなものであり，「自動詞＋自動詞（或いは形容詞）」という構成をもっている。主主動補が本来，こうした構成をもつことは，王力 (1943-44) も指摘している[13]。‘吃饱饭’，‘喝醉酒’の場合も，その構造全体が提供する情報内容からすれば，もともと，目的語をとる必要性がないわけであるが，第一成分に目的語をとることのできる動詞が置かれた場合の形式上のルールに従って，「動詞＋補語＋目的語」という構成が保たれていると考えられる。つまり，‘吃饱饭’，‘喝醉酒’は，本来「自動詞＋自動詞」という構成によって表わされる主主動補の変異形態であるというのが，筆者の見解である。

3節において取り上げた，赵の例：

做累了事　‘仕事をして疲れた’

の場合は，‘做事’（仕事をする）が，全体として一つの行為を表わすような動賓構造であり，‘事’は虚目的語である。又，‘做累’という動補構造は，‘事’という虚目的語しかとることができない。これも，‘吃饱饭’‘喝醉酒’と同一のタイプであると言える。ただ，‘做累’の場合は，‘做’によって表わされる行為が，‘吃’，‘喝’に比べ具体性に欠けるため，‘做累了’（目的語‘事’を消去した形）だけでは，意味が明瞭ではない。

5. 主主動補の補語

「白話百万字テキスト」に見られる，目的語をとる主主動補の中には，次のような例もある：

7) 读惯西洋小说的我国小说家，再拿起一论语——孟子一来一读，～ (旧 110)
‘西洋の小説を読み慣れた我国の小説家が，『論語』や『孟子』を手にとって読むと，～

8) 驶车的面前的那把小刷子，自動的左右摆着，刷去玻璃上的哈气，也颇有趣。刚似乎把这看腻了，车已到了家门～ (骆 99)
‘運転士の前にあるその小さいブラシが自動的に左右に振れて，ガラスのくもりを拭い去るのがおもしろい。それに見飽きたかと思うころには，車はすでに門前に着いていた’

9) 祖父把些话转说给翠翠，翠翠也就学懂了许多事情。 (边 437)
‘祖父が翠翠に伝えて話してやると，翠翠は色々な事情をすぐに理解した’

10) 从六七岁就逐渐学会了所有的家务，～ (哗 35)
‘六，七才になると，徐徐に家事の一切ができるようになり～’

例文中の動補構造‘读惯’，‘看腻’，‘学懂’，‘学会’について，それぞれの構造全体の論理上の主語を仮にSとすると：

S读惯西洋小说→S读，S惯，‘Sが読みSが慣れる’
S把这看腻→S看，S腻，‘Sが見てSが飽きる’
S学懂许多事情→S学，S懂，‘Sが学びSがわかる’
S学会家务→S学，S会，‘Sが学びがSできる’

のようになり，これらは主主動補であると理解できる。しかし，Sと補語との結びつきの部分を抜き出してみると：

S惯　‘Sが慣れる’
S腻　‘Sが飽きる’

13) 王 1943-44, p. 150

S 懂　‘S がわかる’
S 会　‘S ができる’
のように，これらの主述文が，十分な情報を提供し得ていない印象を与えるが，それは，‘慣’‘賦’‘懂’‘会’が，一般の純然たる自動詞のようにただ行為主体とだけ構造関係をもっているのではないためと思われる。‘慣’を例にとると，陆 (1951) は：
他慣了　‘彼は慣れた’
のように，単独で文中の述語となり，何の補足語もとっていない例を挙げているが，吕 (1981) は：
这种方式他已经慣了　‘この方式に彼はすでに慣れた’
用圓珠笔写字我还不慣　‘ボールペンで書くのに私はまだ慣れていない’
のように[14]，‘慣’という状態の向けられる対象を，文の主題として明示している。

動補構造の補語として用いられる‘慣’については，ヤーホントフ (1957) は，「動作を遂行した結果起こるところの，動作主体とその動作との関係を示す」ような補語のグループに分類しており[15]，又，王力 (1943-44) は，第一成分によって表わされる動作自体の状況を表わすものとして，‘慣’を捉えている[16]。

上掲の吕が挙げる例の中には，‘慣’の対象語が明示されているが，7)～10) の場合も：
西洋小说——慣　‘西洋の小説に慣れる’
这　——賦　‘これ（前文に描かれた情景）に飽きる’
许多事情——懂　‘多くの事情がわかる’
所有的家务——会　‘あらゆる家事ができる’
のように，動補構造の目的語が，補語の対象語として機能していることがわかる。これらの対象語は，日本語にすると，感情や能力の向けられる対象を表わす「に」格や「が」格をとるが，中国語では，‘于’や‘对’を用いて表示することができるし，又，‘懂’，‘会’の場合は：
懂许多事情
会所有的家务
のように，直接に動賓構造をつくることができる。つまり，これらの語は，主主動補に属する補語ではあるが，その一方で，それ自体の意味を補う主格以外の名詞成分を必要とするところから，動補構造の目的語とも，一定の構造関係にある。

例 8) の動補構造‘把这看賦了’は，「把」字文の中に現われており，又，‘慣’の場合も，「白话百万字テキスト」以外の例ではあるが：
11)　把这个样儿看慣了，也都不理论了
(王1943-44, p. 149)
‘この様子に見慣れてしまい，もはや問題にはしなくなった’
のように，「把」字文の中で用いられているものがある。‘懂’，‘会’が補語となっている場合は，たとえば：
我把他的话都听懂了　‘私は彼の話がすっかりわかった’
我把滑冰学会了　‘私はスケートをマスターした’
のように，かなり一般的に「把」字文に現われる。先に見たように，赵 (1965) は，動補構造の中の補語に対する論理上の主語が，その文の文法上の主語である場合には，その動補構造を「把」字文の中で用いることができないと述べているが，その反証として，上掲の例を挙げることができる。ただし，これらの‘慣’，‘賦’，‘懂’，‘会’は，主主動補の補語ではあっても，同時に，動補構造の目的語とも構造関係をもっており，その点で，‘吃饱’，‘喝醉’，‘做累’の中の‘饱’，‘醉’，‘累’とは性質を異にしている。このように，主主動補の中の補語には，性質を異にする二つの

14)　例文は，吕 1981, p. 211 より
15)　ヤーホントフ 1957, 邦訳の『中国語学』93, pp. 14～15
16)　王 1943-44, p. 149

種類の存在が認められる。

6. おわりに

本稿で考察したところを整理すると：

（1）‘吃饱饭’，‘喝酔酒’などが対格構文，及び受動構文に変換できないのは，これらが主主動補であることが直接関係しているのではなく，動補構造の目的語が虚目的語であって，具体的な事物を表わす語として機能していないからである。

（2）主主動補の中にも，対格構文に変換できるものがあるが，そのような主主動補の補語は，動補構造の目的語とも一定の構造関係をもっている。

ということになる。

例文引用作品の略称リスト

巴金『家』（家）
張愛玲『秧歌』（秧）
夏済安『旧文化与新小説』（旧）
老舎『駱駝祥子』（駱）
沈従文『边城』（边）
徐懋庸『哗子』（哗）

参 考 文 献

橋本萬太郎 1981.『現代博言学』東京：大修館書店 (1981)

龙果夫，A. A. (Драгунов, A. A.) 1952. «Исследования по Грамматике Современного Китайского Языка» Москва～Ленинград：Издательство Академии Наук СССР (1952)
[中国語訳：郑祖庆訳『現代汉语语法研究』上海：科学出版社 (1958)]

吕叔湘 1981.『現代汉語八百詞』北京：商務印书館 (1981)

陆志韦 1951.『北京话单音詞詞汇』北京：科学出版社 (1956)

王还 1959.『“把”字句和“被”字句』上海：上海教育出版社 (1984)

王力 1943–44.『中国現代語法』（上・下）商務印书館，香港：中华书局 (1979)

ヤーホントフ，С. Е. (Яхонтов, Сергей Е.) 1957. Категория Глагола в Китайском Языке. Ленинград：Издательство Ленинградского Университета.
[邦訳：橋本萬太郎訳『中国語動詞の研究』訳稿 p. 98 以下]

余霭芹 1964. “Resultative verbs and other problems,” *Project on Linguistic Analysis Report* 8 (1964) 36–94. Columbus：The Ohio State University Research Foundation.

——— 1966. *Embedding Structures in Mandarin*. Project on Linguistic Analysis Report No. 12. Columbus：The Ohio State University Research Foundation.

——— 1971a. *Mandarin Syntactic Structures*. Unicorn (Chi-Lin) No. 8. Princeton：Chinese Linguistics Project, Princeton University.
[中国語訳：宁春岩・侯方訳『現代汉語句法結构』哈尔滨：黑龙江人民出版社 (1982)]

——— 1971b. “Descriptive adverbials and the passive construction,” *Unicorn* (*Chi-Lin*) 7 (February 1971) 84–93. Princeton：Chinese Linguistics Project, Princeton University.

赵元任 1965. *A Grammar of Spoken Chinese*. Berkeley and Los Angeles：University of California Press.
[中国語訳：丁邦新訳『中国话的文法』香港：中文大学出版社 (1980)]